

浄土

1989-9

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（運輸省特別授受承認雑誌）第三二五号
平成元年八月二十五日印刷 平成元年九月一日発行

第五十五卷

九月号



平成元年夏 4体仏の二

小林



九月の秀句

足音のわれにつきくる良夜かな

星野 立子

秋彼岸酔へども訓へ堪へもする

中村 草田男

取り留むる命も細き薄かな

夏目 漱石

九月号



舍利弗及び諸の比丘、一切世間、天人阿修羅等、仏の所説を聞きて歓喜し信受して、礼を作して去りき。

——『阿弥陀經』

目次

法話

「彼岸」の心……………宮 沢 善 弘……(2)

お彼岸に想う……………正 村 瑛 明……(9)

お盆とお施餓鬼法要に因んで(下)……………金 子 寛 哉……(16)

童話の世界〔V〕

音(その五)——「ズルズルズルってなんの音」…ぬのむらてつや……(25)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <30>

海と山の狭間で

……………木 下 隆 一 ……(31)

——我が思い出に住む犬たち(16)——

◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(9)

……………松 浦 行 真……(38)

——大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

「彼岸」の心



みや ざわ ぜん こう
宮 沢 善 弘

(横須賀市正観寺住職)

昨年、私の寺の窓から見える東京湾で大変悲惨な海難事故が起こりました。

お話すれば、ああそうだったか、と思いついて下さるでしょう。大型観光釣り船『第一富士丸』と海上自衛隊潜水艦『なだしお』との接触事故であります。

それは七月二十三日の事でありました。

未だ行方不明者のある中で、五十米の海底に沈没した『第一富士丸』の引き上げ作業が眼前で始まりました時には、三十名に及ぶ人としていた被災者のことが余りにも気の毒なので、死者に対しては冥福を、生死不明の方には無事の救出をと願い、寺の総代、世話人と近所の人達に集まってもらい、現場に向か

って浜施餓鬼の法会を修したのであります。

今日は平成元年七月九日、日曜日です。夕方のテレビニュースを見ていましたら、近くの海上自衛隊総監部にその遺族の方々が集まって、二週間早い一周忌を勤め、自衛艦に乗って現場に着くと花束や生前の嗜好品などを海面に捧げて『み霊よ安らかに』と、合掌して祈る姿が放映されました。

一年という歳月が余りにも速く巡って来たのに驚きながらも、私は海に向かって十遍のお念仏を称えさせて頂きました。

さて、その日の夕方のことです。日曜日のことで、私は二人の孫とテレビ漫画の『サザエさん』を見て楽しんでいました。

ところが、実に困った内容の、と言うよりは、いささか問題だと思った画面の進行に、私はたじろぐ思いをしたのであります。

サザエさん一家の団らんの中で、地獄が在

るのか無いのか、と言うことが話題になり、在るとも無いとも結論が出ません。カツオ君は「それは迷信だよね、お父さん……」と父親に同意を求めますが、父親も「それは難しい問題だな」と、言葉を濁します。

そこに菩提寺の和尚がやって来しました。

お盆の棚経のようで、和尚は仏壇に向かって読経し、一家は後ろに坐って拝聴します。やがてお経が終わり、和尚が一同の方に向きを転ずると、カツオ君が先程の疑問を「地獄は迷信ですね、和尚さん……」と尋ねます。

和尚は父親と同じく不明確に、「それは難しい問題じゃな……」と答えます。カツオ君が「和尚さんは信じますか……」と追求すると「ウーン、まあ、信じとるな……」と、その答えは非常に曖昧に聞こえます。

母親とサザエさんは、和尚に冷やした西瓜を出しますが、和尚は手を着けません。二人

は、去年はビールを出したことに気付いてそれに取り替えます。

漫画の結末は、ビールに酔った和尚が、片はだ脱いで、坊主頭にねじり鉢巻をして片手でグラスを差し上げ、氣勢を上げて「地獄が在るか無いか、死んでみなけりやわからない」と怒鳴る姿なのであります。

孫どもはゲラゲラ笑いましたが、私はとても笑うどころの心境ではありませんでした。『死んでみなけりやわからない』ではなくて、『わかつている』と答えることが出来る『信の確立』がなくてはなりません。それでは、仏壇に向かって何の為に経を読むのか。遺族が霊よ安らかにと祈るのに対して、死んでみなけりやわからない、と言えるのか、ということになる。余りにも非主體的な言葉ではないのか、どうして「迷信ではない」と、決然言えないのか、と考えたのであります。

漫画に対して腹を立てるなど、外から見ればオカシイと思われるも、漫画がどうこうと言うのではなく、そういう和尚の姿なり、曖昧な心の奥底が、多くの人々の嘲笑を誘う題材になること、そのことを顧みて一入恥ずかしい思いが身を責めたのであります。

浄土宗を開かれた法然上人は、御年五十四歳文治二年（一一八六）秋のこと、京北大原の勝林院で当時の仏教界を代表した各宗（法相・三論・華嚴・法華・真言・仏心等）の学僧あまた大勢と対して、今日で言えば「法然上人に念仏の果徳を聞く会」のような催しに臨まれて問答をされました。これは有名で『大原談義』とか『大原問答』と呼ばれたことであります。その談義は一日一夜も続いたと言う程に熱の入った会であったようであります。その中身については省略させて頂きますが

会の主催者で、後に天台座主ざすになられた頭真かみまことという方は、法然上人のお話でお念仏の尊とうととさ、ありがたさが身に染しみ、そこで感涙をおさえることが出来ず、自ら香炉こうろを執とつて高聲こうしょうに念仏をなされたと、今に伝えられているのであります。

この大原談義のことを法然上人は「大原にして、聖道浄土しやうどうじやうどの論談ありしに、法門は牛角ごうかくの論なりしかども、機根きこんくらべには、源空げんくう、かちたりき」と、後でお話になったと伝えられています。源空げんくうとは法然上人のお名前であります。『かちたりき』は、勝まさった、ということです。機根きこんくらべに勝まさった、とは、競争に勝かつたと言うようなことではなく、例えば水を受けるのにヒシヤクとバケツとでその量を比べるとバケツが勝まさる、という程の意味に取るべきでしょう。場合によっては、ヒシヤクの方がバケツよりも有効な時だっているの

です。これは『機根』という言葉がよく表わしています。後になって上人が顧みて思われたことは、ご自身も念仏に励み、なお、人に向かつてナムアミダブツを申しなさいと勧め、その対象である末代の衆生とは、偏ひとへに念仏をもって現当げんたう（現世には生きるよるべし、未来は弥陀の摂取不捨の本願の頼みとして）の祈りと心得、生業にいそしむ市井の人々なのだと、その時に確信された喜びを述懐されたものであると拝すべきでしょう。

彼岸ひがんとは到彼岸たうひがん、往生浄土のように此岸このしから彼岸・極楽に到ること、そこに渡る努力・修業のことです。彼岸会ひがんえは春分・秋分の前七日ずつ勤める法会のことであります。

彼岸会ひがんえは日本独特の行事で、聖徳太子の頃から始まったとされたり、また、浄土宗が依り所とする観無量寿經かんむりやうじゆきやうの日想観にっそうかんに根拠がある

などと色々言われますが、今回は別の角度から見てみようと思います。

先年スリランカに旅をしてキャンデーの仏歯寺に参拝しましたら、塔前に立つお坊さんから、何という名でしたか真白なお花を両手に沢山頂載しました。仏歯を納めた金色まばゆい仏塔のぐるりにまかれていた生花でしたが、ふと思ひ出したのは、幼少の頃、母から聞いた「お彼岸のお団子は白い小さな花の代りですよ」という言葉でした。

私たちは漢訳經典を主に致しますが、南方仏教の彼岸について知りたいと思い、早速、南伝大藏經を紐解くと、『彼岸』という語を用いた例だけを調べてみても、さすが、枚挙のいとまがない程に出て来ます。

参考として、施餓鬼、施食は施の行の中に出て来ますが、盂蘭盆はありません。

南伝經典に伝わる『彼岸』は『悟り』また

は『悟りの境地』と用いる場合が多いようです。パーリ語のパーラ(Pāra)から派生し變化

した語は、彼岸、彼岸に到る者、彼岸道、彼岸に達した、究竟を得た、極意に達した等々の日本訳で無数に出て来るのです。中には少ない例ですが、涅槃の意味にも用いられます。

○經集(小部經典)『ダニヤ經』より。

1 牧牛者ダニヤ曰く(數萬の牛を所有し、遊牧生活をして満足しているダニヤに、釈尊は足らざることを説く)

我は既に飯を炊き乳を搾り已り

マヒー河の岸の近くに妻子と共に住す

家は葺かれ火は燈され居れり

2 世尊宣はく(2・4で、釈尊は悟りの内境。悟りの満足の大きさを示して教えられる)

我は忿なく心の頑固を離れ已り

マヒー河の岸近くに一夜の宿をなす

我執の家は剝がれ煩惱の火は消され居れり

3 ダニヤ曰く（マヒー河は、インド西北カンペイ湾に注ぐ小河。アラビヤ海側）

蛇も蚊も居ることなく

牛共は沼地に茂れる草を食み

雨降り来るとも堪へ忍ぶべし

4 世尊宣はく

筏（聖道）は既に組まれ善く作られたり

暴流を調伏し已に渡りて彼岸に到れり

（今や）筏の要あることなし（以下略）

○弥蘭王問經の珍らしい例（ミリンダ王、前二世紀頃北印度の舍竭王イオニヤ（ギリシヤ）人）

第二『百年非福をなす問』より。――

王は言へり「尊者那先よ、卿等は言えり、

『たとひ百年非福をなさんも臨終に仏歸依の

一念を獲得せば天上に往生すべし』と。予は

この言を信ぜず」と。（中略）（那先、中印度雪山

の出。阿羅漢果を証し、後ミリンダ王に法を説く）

長老は言へり、「大王よ卿は此を如何に思

ふや。小なる石にても船なくして水上に浮ぶや」と。

王、「尊者よ然らず」と。

長老、「百車量の石にても船に載せられなば

水上に浮ぶや」と。（多量の石材でも船にのせれ

ば浮かぶか）

王、「尊者よ然り、水上に浮ぶべし」と。

長老、「大王よ、善業は船の如く（中略）彼方

なる良き渡津ある彼岸、涅槃の上陰地に進ま

ん」と。（以下略）

さて、法然上人は『彼岸』にどのような見

解をお持ちになつていられたのでしよう。

上人は、中国浄土教の先達である善導大師

の觀經疏を読み、念仏の根本精神を領解し、

四十三歳の時に念仏の法門に歸してから二十

三年、齡六十六歳、浄土一宗の要義をまとめ

て示された選択本願念仏集の卷末に、次のよ

うに書き遺しておられます。

- 「それよりこのなか今日に至るまで、自行化^①他唯念仏を緯^ととす。然る間、希^{まれ}に津を問うものには、示すに西方の通津^{つうしん}をもってし、適行^④を尋^{たず}ねる者には、誨^{おし}うるに念仏の別行をもつてす。これを信ずる者は多く、信ぜざる者は^{すくな}劣^{まさ}す。当に知るべし浄土の教、時機^{とき}を叩^{たた}きて、行運^⑤に当^{あた}るなり。念仏の行、水月を感じて、昇降^{しょうかう}を得たり……(後略)。(石井教道師和訳)
- 実に学^{まな}ぶべき銘訓^{めいくん}であります。専心称名念仏、これを措^おいて外に彼岸の心はないと知るべきであります。
- ① 自^{みづか}ら行い、迷える人にもすすめて兄管念仏を実修して来た
 - ② 生死苦海の渡り場・彼岸
 - ③ 西方極楽浄土は誰でもいける彼岸のみなど
 - ④ 特に特別な修行
 - ⑤ 今こそ念仏が行われる機運にある
 - ⑥ 念仏は月、人々は水。月水に照って、びったり相応している

◎“維持会員”への

ご加入のお願い!!

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践を^{してまいりました}。現在、『浄土』誌は五十五巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一歩一歩前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

《法 話》

お 彼 岸 に 想 う



まさむら えいめい
正村 瑛明

(東京・北区正受院住職)

だれにでも浄土への白道は開かれている。

ごくらくじょうど
極楽浄土は一所

つとめなければ程遠し
つとめなければ程遠し

われら 愚にて
我等が心の愚にて

ちか
近きを遠しと思ふなり

— 梁塵秘抄 —

月かげの至らぬ里はなけれども

ながむる人のここにぞすむ

——法然上人——

信心の露だにあれば草も木も

へだてず照らす法の月かけ

——徳本上人——

かぎりなきめぐみの中にすみぬれば

ねてもさめてもうれしかりけり

——弁栄上人——

光明遍照

如来大悲の御手深く

十方世界

愚痴のわが身にそいたまい

念仏衆生

御名呼ぶ声をたよりにて

摂取不捨

弘誓の船にのせたもう

人間は、摂取不捨の中にある自分に気づく

ことによって、摂取不捨の心が世界に充滿していたことに気づいてゆく。

昭和三十四年三月、ガン末期患者竹下昭寿氏（30）に、主治医高原憲先生は胃ガンを告知して、次の歌を昭寿氏に送った。

何もかも我一人のためなりき

今月一日のいのちたふとし

母と兄哲氏がこの歌を額に入れて壁にかけてくれたのである。それを見ながら昭寿氏は、日記に、

ほんとうに私にびったりの歌だ。「我一人のため」——大慈悲の真っ只中に抱かれて

残り少ない業を果していけるこの身の幸福。(略)

先生こそまさに大慈父だ。先生に診ていただきながらこの世を終らせてもらう幸福者。大慈大悲の中心にこうしておかせて頂いてもつたいたいばかりだ。何一つ精進もすることのできない恥多いこの私に、身にあまる大慈悲を注ぎ包んで下さっているとは――。「摂取不捨の利益にあづけしめたまふ」。私にはもつたいたいのだけれど、如来さまはそのまんまでいいとおっしゃるのだ。だからこそ私は救われていくのだ。如来の本願のかたじけなさ。ほんとに「我一人のためなりき」です。

と書き遺しています。

告知後、家族の者が泣きながら昭寿氏にすがる。

「昭寿すまんね。先に行っとなつてね。お父さんも待ってるからね。いずれお母さんたちも行くからね」

と言って母が泣くと、

「いいよ。いいよ。三十まで生かさせていただいたもんね」

と言ってほほえむ。しばらくして、

「そうじゃったとね。みんなに心配かけてね。ありがとう。ありがとう」

「お母さんや兄ちゃんのおかげで仏縁にめぐまれてほんとによかった」

「間に合ってよかった、よかった」

父の写真がみたいと言うので、兄哲氏が壁にかけてやると、メガネをかけて、

「お父さんはとてもいい顔をしているなあ。」

「お父さんがなくなってから何年になるかねえ」

「まる十五年」

と答えてやると、

「お父さんが待つとるとよね」

高原先生が、いろいろと話して下さる。

「往生というのは、結局は出船のこと。早い出船もあれば、遅い出船もある。めざすところは西の浄土」

「西の浄土とはよく言ったものだねえ。天国では落着かぬ。東では暑くるしい。すばらしい象徴ですね。仏さまは頭がいいね」
「人間は量と長さばかり問題にしている。金・いのち・うまいもの——すべて量と長さばかり。大事なことは方向がきまること」
「人生は一応五十年の契約。しかし、家主が不意に出て行ってくれと言うことがある。その場合、田舎に自分の家がある者は、『今までお世話になりました。ありが

とう』と言って出て行ける」

福岡から弟博之氏がかけつける。昭寿氏は握手をして感謝を述べ、母を頼む、日本一の弟だと言うと、博之氏は泣きくずれる。

「おお、泣いてくれ。腹いっぱい泣いてくれ。名ごりが惜しくもんね」「お浄土があるからまた会えるたい」

「ほんとにみんななつかしい人ばかりじゃもんね。会いたくない人は一人もない。

——一筋の白道は行くとたい」

四月一日夕、家族でビールを飲む。その時の模様を、兄哲氏は日記にこんなふうに記し

ている。

「お互いの前途は祝して——」と昭寿が言
って飲む。

「つめたくて、おいしか」

明かるいふんい気が部屋いっぱいに溢れる。
笑い声まで起こる。どうしてこれが死の病
人の床の風景であろうか。それは、死を起
えた世界の風景である。この味は、人生五
十年のモノサシでは計れない。人生五十年
を超えた世界の味わいである。だからこそ、
また、人生五十年を力強く、たくましく歩
いて行ける世界である。母が、「あたしや、
うれしか」と言って、泣く。

兄哲氏も聞法信心の人であることが、こと

ばの端々にうかがえて尊い。

本願の船には乗れど煩惱の

船のともづなはなしかねつも

高原先生の歌である。そして、こう言う。

「最後まで人間の煩惱は尽きない。ともづなが離せないのが本当。でも、力尽きてともづなを放すのは同時に、願船は動き出して光明の世界へ」

昭寿氏最後の日を、ふたたび、兄哲氏の日記によっていただいてみよう。

四月十七日（金）晴

朝五時過ぎごろから具合が悪くなったので、病院へ電話をかけに行く。帰ってくると、苦しい息の下から、

「連絡はついた？」と言う。「うん、すぐ来てくださいよ」

「どんな姿勢をしたらいいかしら。どんなにしてもきつい」

当直の先生が駆けつけてくだされ、直ちに注射その他万全の措置を取ってください。

「背中をもんで——。背中が痛い」と言う。すぐもんでやる。

七時過ぎから、極度に容態が悪くなる。呼吸が早い。そして一呼吸一呼吸がとても苦しそう。脈が早鐘を打つように早い。唇を水でしめしてやる。

母と私、昭寿の手をしっかりと握りしめて、

お念仏を称える。昭寿、いっしんに母の顔を見つめる。

窓の外から、うぐいすの声が聞こえてくる。

母が、手をしっかりと握りしめながら、

「このまんまよ。このまんまよ。もうすぐ楽にさせていただけるのよね。お父さんが待ってんなさるよ」と言ってお念仏する。

昭寿、母の顔を見つめながら手を組み合わせるような恰好をする。そして、かすかにつぶやくように、「なむあみだぶつ」と称える。しばらくして涙をほろりとこぼす。

母がガーゼでいねいに拭きとってやる。

次第に、呼吸、脈が衰えはじめる。そして、喘ぐような、大きな息を数回して、七時二十五分、とうとう最後の息を引き取る。がんばれと激励することもなく、しっかりとし

ろと力むこともない、静かな往生であった。両手離した、あるがままの、安らかな最後であった。

病室にきれいな花をたくさん飾って、この美しい弟の死を荘厳してやった。

竹下昭寿 遺書

『死の宣告をうけて』より

竹下昭寿氏と氏をめぐるとくしみみの世界は、お浄土からとどけられた深い御恵みであったのではないか。

お浄土はないのではない。

見えないだけである。

法 話

お盆とお施餓鬼法要に因んで(下)

金子寛哉

(大正大学講師)

(四) 餓鬼とその救済

お盆とお施餓鬼の法要が本来二つの異なるものであるということについては前号において述べた通りである。しかし、今日一般的に

はこのお盆とお施餓鬼の法要を併修する「盆施餓鬼」の形式が、他の行事と併修されるよりもはるかに多いように思われる。このは一体どういうことを意味しているのであろうか。お盆行事のもとになっている『仏説盂蘭盆経』によると「餓鬼」の境涯に落ちている亡

き母を救済する方法として釈尊が目連に教えたのは、七月十五日の夏安居の最終日、僧自恣の日に次のようにすべきことを説かれたのである。即ち、

七世の父母及び現在の父母にして厄難中の者の為、飯と百味と五果とを具え、盆器に汲灌し、香油を挺燭し、床に臥具を敷き、尽く世の甘美をもって盆の中に著け、十方の大徳衆僧に供養すべし。

とあり、その十方衆僧に供養するという功德善根の力を振り向けることによって、

現在の公母ならびに七世の父母および六親眷属にいたるまで、皆三途の苦しみを脱することを得。時に応じて解脱し、衣食自然になり、苦し復人有りて父母現に在せば福業百年なり。若し已に亡りし七世の父母は

天に生じ、自在に化生して天の華光に入り無量の華樂を受く。

と述べている。つまり、修行を積んだ十方衆僧に食物を供養し、それらの十方衆僧が修行によって得た道力をもって呪願すれば、その功德力によって、自ずと餓鬼界に陥っている者も救済されるという「餓鬼の救済」ということが一つの中心となっていることがわかる。それと同時にまだこの世に健在にいる者は壽命が百才までも延び、また亡くなっている者は餓鬼の境涯から天上界に生ずることも出来ると説くのである。

一方「施餓鬼」の方を見ると、施餓鬼法要の因縁となつたお経文には、『救面燃餓鬼陀羅尼神呪経』、『甘露水陀羅尼呪』、『救拔焰口餓鬼陀羅尼経』等、幾つかの經典が見られる

のであるから、現在最も多く用いられているのは『救拔焰口餓鬼陀羅尼經』のようである。

この經文によると、積尊の十大弟子の一人といわれる阿難尊者が、一人静処にあって積尊の説かれた教えを思念していたところ、真夜中になって、阿難の前に焰口餓鬼が現われ、阿難に向つて次のように言われた。

却りて後、三日にして汝の命、將に尽きて即ち餓鬼の中に生ぜんとす。

と。阿難はこの言葉をきいて恐怖心に襲われ、焰口餓鬼にたずねた。「若しも私が死んだあと、餓鬼の境涯に生れた場合には、どのようにしたらその餓鬼の苦しみから抜け出ることが出来るのでしょうか」と。

その時焰口餓鬼は阿難に向つて次のように

言われた。

汝明日に、若し能く百千那由他恒河沙数の餓鬼ならびに百千の婆羅門仙等に、摩伽陀国所有の斛を以つて布施し、各々に一斛の飲食を施し、ならびに我が爲に三宝を供養するに及べば、汝増壽を得。

と。このようなことがあつて、阿難が積尊の教えを受けて行なつたのが「無量威徳自在光明殊勝妙力」という「陀羅尼」(神呪)を誦して餓鬼及び婆羅門仙等に上妙の飯食を施す、所謂「施餓鬼法要」であつたのである。

「盂蘭盆会」の因縁の中心が亡母の救済であり、「施餓鬼会」の中心が阿難の延年増壽にあることは今見た通りであるが、両法会に共通しているのは「飲食物を施すことによつて餓鬼の境涯に陥っている者を救済し、また

その功德によって延年増壽することを得、天上界に生れることが出来る」とする点である。

この二つの法要が、他の法要よりはるかに多く併修されるようになったのは、このような「餓鬼の救済」という共通点があった為ではなからうか。この点のみが更に強調されると両法会の主旨が混同され、一層併修が進められるようになったのではないかと考えられる。

(五) 阿難尊者について

さて、「盂蘭盆会」の中心人物である目蓮については前号に述べたので、ここでは「施餓鬼会」の中心人物である阿難について考えて見たいと思う。

阿難はインドの言葉でアーナンダといい、歓喜、慶喜、無染等と訳されている。釈尊の十大弟子の中では多聞第一といわれ、インドのカピラ城に住む釈迦種族の出身で、釈尊の徒弟にあたる。『大智度論』三には阿難の誕生について次のように記している。

悉達多菩薩は菩提樹下に至りて金剛座に坐す。及至、是の時斛飯王家の使来りて浄飯王に白して言はく、貴弟、男を生むと。王心に歓喜して言はく、今日は大吉なり、是れ歓喜日なり。来使に語りて言わく、是の子は当に字して阿難となすべし。

と。これによると、阿難尊者は悉達多太子、即ち釈尊が悟りを開かれた日、つまり仏歓喜日に生まれたことになる。阿難の訳名を、歓喜、慶喜とするのは、この故事にもとづくも

のと思われる。

阿難は生後、容姿端正であつて、面^{おもて}たちは曇りのない、淨い満月のようであり、その眼ざしは青蓮華のようであつたと言われる。その御身体も光り輝く明鏡のようであつたので、出家以後も女性から誘惑されることが多く、これに関わる説話が經典中にも幾つか見られる。

阿難が出家したのは、釈尊が故郷を訪問された時、その故郷、若しくはその南方遊化の途中のことではないかとされている。

阿難の伝記中で最も注目されるのは次の三点である。その第一は、二十余年間影の形に従うように釈尊に侍従したことであり、その第二は釈尊の育ての母マハーパジャーパティの出家を釈尊に勧めたことであり、その第三

は阿闍世王の保護の下に行なわれた經典の第一結集において、摩訶迦葉の指揮のもとに經典を誦出したことである。

今の第一について見ると、釈尊が成道されて以後二十年間は侍者が一定せず、釈尊も次第、年老いて、侍者を一人得たいと希望された為、人々は釈尊の意を察して阿難を推撰した。しかし、阿難はその時すぐさま承諾したのではなく、次のような三つの願いをお許しただけならば侍者となりますといっている。その三つの願いとは、

(1) 若し釈尊が、自らに布施された衣食を私に与えず、而も私が受けた布施は釈尊に奉げることをお許しただけかどうか。

(2) 又釈尊にお逢いしたいと他国から来た人を直ちに釈尊の前に案内することをお許し

ただけるかどうか。

(8)又私の不在中に行なわれた説法は後に釈尊から直接お聞きすることをお許しいただけるかどうか。

という三つのことである。何故このようなことをお願いしたのかというこ、「人々が、阿難は衣食の為に釈尊に随従している」といわれるのを防ぐ為であったといわれている。

この願いはただちに許され、以来二十余年間、釈尊が入滅する最後迄随従することとなった。このような中にも阿難の人となりがしのばれる。

第二の点については、この事が何時頃起ったことかは定かではないが、釈尊の父、浄飯王じやうはんがなくなられて間もなくの頃ではないかともいわれる。最初、マハーパジャパティが出

家を希望された時、釈尊は許されなかった。

その為マハーパジャパティは舍衛国から毘耶離国まで釈尊の後を追ひ、必死になってお願いした。阿難はその様子を見かねて、釈尊に義母には養育の恩もあったことを申し添え、その出家をお許しを取りなしたものと思われる。釈尊はやむを得ず「八敬の法」を条件としてようやくことを許したといわれる。これが仏教教団の中に尼僧が出来た最初といわれ、その意義は大きい。ここにおいても阿難の人々に接する接し方がうかがわれ、又阿難でなければ出来ない独自の働きをしていることが解る。

第三については、釈尊が八十才になられ、自ら入涅槃の日の近いことを悟り、それを阿難に告げた。しかし、阿難はまだ悟りを得て

いなかった為、釈尊との別離の情に堪え切れず、哀しみのとりことなってしまう。やがて釈尊が入滅すると彼は悲泣して悶絶する程であった。摩訶迦葉が遅れて釈尊の荼毘に出席してのち阿闍世王の保護のもとに經典結集が考えられた。その時阿難は独り拘尸城に止まって七日間仏舍利を供養し、又祇洹精舎に到って仏坐を拜し、最後の供養を行なつてのち王舎城へ行つて經典の結集に加わろうとした。しかし、摩訶迦葉は阿難がまだ悟りを得ていないこと、及び「女人の出家を請うた為正法の年代を五百年ちぢめた」、「仏の留寿を乞わなかった為入滅を早めた」等の五つの罪があるとしてことをこぼんだ。阿難はこれらの五罪を人々の前で懺悔し、そのあと必死になつて禪定の修行をした所、その夜の中に大

悟し、迦葉の指揮のもとに五百人の大阿羅漢の中に加わり、經典の結集に参加することが出来たと伝えられる。

以上見たように、数多くいる釈尊の弟子中、阿難は決して早くに悟りを得た優等生ではなかった。しかしその反面、終生人間釈尊に仕えた人間味あふれる、一人の仏弟子として多くの人々に親しまれる阿難像が浮び上つて来る。しかも後世に伝えられた經典の多くはこの人間味あふれる阿難の記憶の中から誦出されたものといふことになる。「多聞第一」の稱の中には以上のような意味も含めて考えられるべきではなからうか。

阿難の登場する經典の数は極めて多い。中でも浄土三部經の中『無量壽經』では釈尊が阿難を相手に浄土の教えを説かれており、

『觀無量壽經』では阿難と韋提希に向つてやはり釈尊が淨土の教えを説いている。このことから考えると、阿難を抜きにして淨土の教えは今日あり得なかつたと言っても過言ではない。

『觀無量壽經』の初めには「即ち大目犍連及び阿難に勅して空より來らしめ」といい、又その末尾では、

仏阿難に告げたまわく、汝良く是の語を持せよ、是の語を持せよとは即ち無量壽仏の名を持せよとなり。仏此の語を説きたもうとき、尊者目犍連、阿難、及び韋提希等仏の所説を聞いて皆大いに歡喜す。

と説かれている。他にも多く注目すべき經文が見られるのであるが、今は省略する。

(六) むすびにかえて

以上、お盆とお施餓鬼法要の要因となつた目連と阿難を中心に見て來たのであるが、釈尊教団の拡張、進展の仕事に殉じた目連。そこには多くの民衆、外道との接觸のあとが見られる。釈尊に隨從し、しかも志操堅固に身を持して、一般民衆、中でも女性の願いまでも釈尊に取りなし、その為自らの悟得は最後まで得ずに過し、それでいながら後世に釈尊の教えを伝える為の原動力となつた多聞第一の阿難。数多くいた釈尊の弟子中この両者が主人公となつて「盆施餓鬼」の法要が今日まで伝承されるのも以上見たような両者の人柄と、その業績にもとづく所が大きかつたのではなからうか。

(了)

◇◇ 平成二年用新版 ◇◇

浄 土 宝 暦

発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
年末年始の好便な檀信徒用施本として、広くおすすめいた
します。

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円 (200ブ以上 特価60円)

送料実費 (300ブ以上はサービスします)

==== お申込み =====

〒 102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8-82187

(童)(話)(の)(世)(界)
〔V〕

音(その五)——「ズルズルズルってなんの音」



ぬのむらてつや

ぼくは南天の実。

あさ目をさましてびっくりしたのです。

ぼくの芽の上のあの石がありません。もう
いちど目をこすってよく見ましたが、たしか
にないのです。

石は横にうごいていました。

ひとばんのうちに大きな石のとうろうが

そっくりそのままうごいてしまったとは。

これでは、だれでもびっくりするのがあたりまえでしょう。

いったいそんなことがありえるのでしょうか。夢をみているのではないのでしょうか。

地上へ芽を出したい南天の実にとっては

この石がいちばんのじゃまものでした。

スクスクココポトポトの音をききながら
やっと地中に芽をだした南天の実なのです。

木の葉のおぼさんのスクスクという声　コ
ココのオンドリの歌　ポトポトとおちるみん
なの涙によってここまできました。

ところが芽のまうえにその大きな石があり
ましたから土のそとへ顔を出すことができま
せん。

「あの石がなかったらなあ」

といつもおもっていたのです。

「ちょっとでもいいから横へうごいてくれた
らいいんだがなあ」

と上をながめていました。

上へ芽をのばすことのできない南天の実
は土の中で根っこをのばして　いつのまにか地

面の中の石をつつんでしまったのです。

それまでだれにも相手にされずに　つめた
くだまっていた石は根っこにかこまれて　だ
んだんとあたたかくなりホカホカホカの石に
なります。

それはまるで

「石焼きいも——。ホッカホカのおいしいお
いも——」

という石焼きいも売りのおじさんの声をおも
いだすホカホカの石です。

「石のようにつめたいね」とか「石でもぶつ
けてやろうか」といわれていた石がホカホカ
石になったのです。

スクスク　コココ　ポトポト　ホカカ

ホカカのあたたかい石です。

あたたかい石のまわりには　いろいろな

きものがあつまります。

根と石のあいだには アリが巣をつくりま
す。アリの巣のあいだにはミミズがいます。

ミミズのそばにはナメクジがいるのです。

石のすきまには カエルがゲロゲロ。

みんなそろうと歌をうたうのでした。

ホカカの石はみんなのおうち

いつもたのしいみんなのすみか

雨がふってもながれない

風がふいてもとびません

ホカカホカカはたのしいおうち

そんなおもしろいみんなの歌をきけること

が石にはうれしいのです。

氷のようにつめたくて いままではだれも

よってきてくれなかった石のところへ みんな

ながあつまっておしゃべりをしてくれるので

すから。

これも南天の根が地中の石のまわりにはり
ついて あみの目のようなりっぱな家をつく
ってくれたからです。

石にとってそのことは とってもうれしい
ことだったのですが ひとつだけ気になるこ
とがあります。

それは石の下の方の南天の芽のことです。土の
中では根をはって みんなによるこぼれてい
ますが 上にある石のために地面へ芽を出せ
ないでいるのです。

芽がのびられなければ 地中の根っこもや
がてだめになり みんなの家はなくなるでし
ょう。

どうしたらいいか ホカカの石はかんがえ
てみんなのいけんを聞くことにしました。

まずさいしょに巣からでてきたアリがいい
ます。

「えへん ホカカの石さんはうごくべきです。
ズルズルズルとうごいたほうがいいのです。
なぜかといえは わたしにもけいけんがあり
ます。ずっと前 わたしには年をとってうご
けない親のアリがいました。巣の中から出る
ことのできない親のためにえさはこぶのが
わたしのやくめでした。自分のからだより大
きいえさをよいしょよいしょと引っぱって
ズルズルズルと穴の中へはこびこむのです。
そのズルズルの音をきいて親アリはよろこん
でくれました。『ぶじにかえってきてくれて
よかった』と。

だから石さんは ズルズルとうごくべきで
す」

つぎにミミズが出てきてしゃべります。

「おほん、ホカカの石さんはうごくべきでし
ょう。ズルズルズルと音をたてて。

なぜならば わたしの親は土の中をいつも
ズルズルとはいまわっていました。です
から親のいる土のあたりは 常にやわらかく
て気もちがよかったです。

それだからズルズルの音をきいていると
あんしんするわけ」

つづいてナメクジがいけんをいいます。

「そう、ホカカの石さんはズルズルズルとう
ごいたほうがいいよ。

だってぼくの親はよくいじめられていたね。
人間はぼくたちを見ると すぐ塩をまくんだ
からこまっちゃうよ。そんなとき すばやく
ぼくを背中にしょって親はにげるのさ。どう

しても塩の輪から出られないときは ぼくを
しよったまま ズルズルと塩の中へ入ってズ
ルズルととけていく。そのあいだにぼくは背
中からおりにける。

ズルズルの音をきくとかなしくなるけれど
ゆうきがわいてくる。

石さんは ズルズル うごきなさい」

石のすきまからゴソゴソとでてきたガマガ
エルが 目玉をギョロギョロさせながらい
ます。

「うん ホカカの石さんは みんながいうよ
うにズルズルとうごいたほうがいいでしょう。
わたしも春の池でたくさんのオタマジャクシ
をそだてるために ながいながい袋をズルズ
ルと生むのです。カエルの仲間がこの地球の
上からきえないように。わたしたちもおてつ

だいますから」

ひとりひとりのいけんを聞いて みんなが
パチパチと手をたたきます。

「そうだそうだ。ここはみんなのたのしい家
なんだ。こんなときにこそ家をつくってくれ
た南天の実におんがえしをしなくちゃ」

こうして石がうごくことになったのですが、
うごくことには またしんぱいもあります。

石がみんなにそうだんしました。

「ズルズルとうごくのはいいのだけれど そ
のために根っこは切れるし すてきな家もこ
われるよ。石をうごかすだけでもたいへんだ。
くるしいこともおおいにちがいない」

そういわれて おたがいに顔を見あわせて
いたアリとミミズとナメクジとカエルが声を
あわせて歌います。

ズルズル石がうごいても
ズルズルみんなついていく
ズルズルくるしみのりこえて
ズルズル前へすすんでいこう
さあさあ石をうごかせよう

ほんとうにアリとミミズとナメクジとカエルで この象のように大きな石をうごかすことができるのでしょうか。

ひるまは暑いので 日がくれてからうごかすことになりました。

アリは ほそいまえ足でヨイシヨイシ
ミミズとナメクジは からだをちぢめたりのぼしたりしてヨイシヨイシ
カエルは おなかでヨイシヨイシ
もうすぐうごくぞヨイシヨイシ

そのようすを見ていたのが地球の地下ふかくボーボーともえているマグマの火です。
「みんながんばっているな。わたしもつたつてあげよう」

地下のマグマは すこしばかり火をつよくして土をもちあげ その地面をかたむけてくれたのです。

ズルズルズル ズルズルズル
「やったあ！ うごいたぞ——」

石がうごいたのは このようにしてだったのです。

南天の実は地上へ芽を出すと あたりは目もまぶしいあかるさです。

(つづく)

木

下

隆

一

随

筆

集

30

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(16)—

木きの
下した
隆りゆう
一いち

いまだに私は虎徹の生まれた日を知らない。生まれたから見に來い、と蓮見小五郎から連絡があったのが、十一月の終わり頃だったから、逆算して、勝手に十一月二十三日生まれとした。祝日で、その日が来れば否応なしに思い出されて、都合がよかったからである。違っても二、三日の誤差と踏んで、

「虎徹よ。お前は『新嘗祭』の日に生まれたんだぞ、分かったな」と、私は半ば自分自身に言い聞かせるように言った。

祝日の呼び方が変わってまだ日が浅く、「勤労感謝の日」というあやふやな言い方より、私には「新嘗祭」の方が馴染みが深かったし、感覚的にもしっくりきたのである。元々が皇室の私的な神事であって、庶民の秋祭りとは趣を異にしていたとはいえ、五穀豊穡を神に感謝する秋の祭りの一つであることには違いなかった。私は秋の皇室の神事の中では、十月十七日の「神嘗祭」よりも、「新嘗祭」の方が好きだった。なぜなら、この頃から朝夕の冷気が一段と増し、身の引き締まる思いに、生きている実感が体に溢れ、そして、なぜか戦時中日本文学報国会短歌部会が選定した「愛国百人一首」で、無理矢理覚えさせられた、

御民吾生ける驗あり天地の

榮ふる時に遇へらく念へば（万葉集卷六 9%）

という歌を、懐かしく思い出したりするのであった。この歌は、海犬養あまの宿禰岡磨が天平六年（七三四）、聖武天皇の詔に応じて奉った難波の宮落成を言祝ぐ歌であり、陽春三月供奉した時の作であるから、「天地の榮ゆる時」が秋の収穫の喜びを表している訳ではないのだが……。

子犬も一年経つと、あらゆる動作がおとなびてくる。梅雨が完全に明けた七月の下旬には、片足を上げておしっこをするようになっていたし、自分の尻尾を追いかけて、キリキリ舞いする遊びもしなくなっていた。この遊びは猫の子もやるが、虎徹は生後三か月目ぐらいから始めたように思う。初めは、自分で尻尾を動かしているという自覚がなく、また

動く尻尾が自分の体の一部であることが分からなかったらしく、しばらく不思議そうに眺めていたが、急に目を輝かすと、やにわにガガッと雄叫びを上げて跳びついたのである。しかし、尻尾は前足の爪先からすりすりすると巧みに抜けて、なかなか捕まえることができない。しまいには痼癢（こよう）を起こして旋風（せんふう）のように回転し、バランスを崩して倒れるまで、勢いよく砂埃を立て、辺りかまわず小砂利を飛ばして、尻尾の先を追い続けるのであった。そんなことを三回も繰り返すとさすがに草臥れるのか、横になって大きな息をしているが、目はチロチロと上目づかいに私を見て、へんなものだ、こんなこともできるんだぞ！と言っているようでもあった。私にはこの虎徹のパフォーマンスが単なる遊びではなく、自己顕示欲の表し方の一例のように思えてならなかった。というのは、このパフォーマンスも何度目かのお披露目となると、なるほど最初の一回だけは真剣に尻尾を追いかけるが、次からは、じやれて見せるという態度があきらかで、虎徹のいたずらっぽい目が、その何よりの証拠であった。

しかし、このパフォーマンスも、片足を上げるようになった頃には、もうやらなくなっていた。パフォーマンスに興味をなくしたというよりは、犬として成年に達したと見るべきであろう。声変わった少年が、ある日突然子供の遊びを棄て去って顧みなくなるのと同様に、牡犬にそんな転換期があるとすれば、それは片足を上げておしっこをする、つまり匂いづけという牡の特権を行使し始めた時ではないだろうか。牝犬の場合は、初潮という生理現象があるので簡単に区別がつくが、牡犬はそれがはっきりしない。犬の生態に詳

しい人に、何か月で成犬になるかと尋ねても、大抵は七か月か八か月という曖昧な答えしか返ってこない。まあ、子犬にもませたのもいれおくてなのもあるだろうから、返答の曖昧さにそう目くじらを立てることはないが、生後七か月か八か月でもいい、おしっこの時足を上げるか上げないかが、牡の子犬が一人前になったかどうか見極める一番の目安になりそうである。

子犬の間は牡も牝もしゃがんでするので見分けがつきにくい、そのうち牝は中腰になって、どちらかの後足をちょっと上げる仕種を始める。そして幾日か試行錯誤を繰り返した後、こわごわ足を上げてするが、支える軸足がブルブル震えてバランスがとれず、折角上げた足にひっかけたりして、様にならぬこと夥しい。虎徹の場合もそうだった。からかい半分に、

「駄目じゃないか、王様に貰った足を汚したりしては」

と言うと、そんな時大方の犬は済まなさそうな顔をして飼い主を見、照れ隠しのように後足でパッパッと土を蹴立てたりするのである。

「犬が足を上げておしっこをするのは、『王様に貰った足を汚さないためだ』というギャグで、戦後の一時期関西の漫才界を牛耳ったコンビがいたが、王様に貰った貰わないはともかく、どの牡犬もやることだから、初めのうちはこの動作に、私はそれほど気を留めていなかった。むしろ漫才師が言った『ギッチョの犬は左足を上げる』という言葉にこだわって、真剣に考えたものだったが、虎徹を連れて歩くうち、これがテリトリ―

(縄張り)を守るのに必要不可欠な行為であることが分かってきた。

匂いづけは自分のテリトリーであることを示して、他の犬に警告するために行うもので、成犬としての自我に目覚めたことを意味している。そのためには、テリトリーと定めためばしいところにおしっこをかけて、しっかり自分の匂いをしみこませておかなければならぬ。「王様の足」を上げておしっこをするのは、目指す位置に、的確に勢いよく、適量のおしっこを飛ばすための動作に他ならなかったのである。

テリトリーづくりに未経験な虎徹にしてみれば、これは大変な作業であった。自分の領土を確立するためには、以前からある他の犬の匂いを一つ一つ完全に消してゆかなければならないから、毎日の見回りは欠かせなかったし、それに加えて領土の拡張を図って未知なる土地へも遠征しなければならなかった。犬が匂いづけする場所は大体決まっているらしく、時には同じところを時間をかけて入念に嗅ぎ回った挙げ句たっぷりかけることもあれば、ほんのお義理に足を上げて真似事だけで済ますこともあった。前者の場合は、多分他の犬が虎徹の匂いを消しかかったのであろう。そこでの匂いづけは執拗を極めた。左足を上げてやったかと暇うと、向き直って右足を上げ、何か所分かのおしっこを消費し、それでもまだ足りないのか、嗅いではかけ嗅いではかけして、しまいにほもう一滴も出なくなることもあった。ギッチョの犬云々という珍説は珍説で終わったが、どちらの足を上げるかは、その時の気分にもよるのであろうが、私の観察によれば、目標が進行方向の左側にあれば、左足を上げてするのが一番自然な姿のようである。家の辺りはハチのテリト

リーであつたから、虎徹は父親の匂いを消して回つていたとも思えるし、山を降りて来て匂いづけした野犬の匂いを消していたともとれるが、どちらにしても古い者の縄張りを新しい者が奪い取るのであるから、まさに下剋上の世界であつた。

「世襲でなく、実力で親父の縄張りを奪うのだから、戦国時代もいいところだよ。それだけじゃなく、山からは隣国の放つた忍者は降りて来るし、……お前も大変だよなあ。武田信玄は上落の途中、織田信長と雌雄を決しようとして、三河の野田城を囲んでいる時病没したが、『明日の近江の瀬田に旗を立てよ』というのが遺言だったそうさ。虎徹、お前明日はどこに旗を立てる？ 東町の外れまで行つてみるか」

一応の見回りを終えて帰つて来ると、初冬の空にはすでに暮色が広がっていた。大学入試まであと四か月足らず。それに進学適性検査という、性格は全然違うがいままでいう共通一時試験的なものが新たに加わることになっていった。しかし、どちらの対策も全く立っていないから、気分は日々落ち込むばかりだった。

「この町にいと、息がつまりそうになるんや。関学じゃなくてもいいんやけど、一日も早く逃げ出すためには、これが一番の早道なんや」

尾島は祖父の神主さんと気が合わないらしく、よくそんなことを言っていたが、推薦で関西学院に入る準備を着々と進めていた。

「なあ虎徹、なるようにしかないよな」

たっぷり水を飲んで満足した虎徹は、そう言う私をきょとんと見上げた。

○『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』九月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八―二―八七

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん}
弘^ぐ
の
生
涯
(九)

— 大僧正岩井智海伝 —

松^{まつ}
浦^{うら}
行^{ぎょう}
真^{しん}

続・従軍

浄土宗が派遣した正使・萩原雲台と副使・

岩井智海の従軍行は、目的が兵士たちの慰問にあったから、大きな部隊のあるところはむろん、たとえ小人数の駐屯地であっても、求められればかならず法要と説法を行った。そ

れを繰返しながらの北上で、岩井は、

『……各隊法話にして日に三回も続く時の如きは予等に昼食を喫するの余暇さへなく、又飛雪紛々たる時の如きはその寒冷に激して、一層の熱心を増すに至る』

(岩井智海著「道しるべ」)

と書いている。この文章は十二月二十三日に鴨緑江を渡って清国入りし、さらに北西へ約五十キロの鳳凰城ほうおうじょうに到着しての体験だから当然でもあろうが、「飛雪紛々」はいかにも感じが出ている。

慰問使の一行はやがてこの鳳凰城から街道をそれ、間道をたどって海城にいたるのだが、九日間にわたるこの旅程は、全従軍中の最大の難コースだった。道は雪に埋もれてわからず、寒さは寒しで、それこそ山中に一軒家を

見つけ、納屋のようなところで荷物運びの「車夫と枕を並べて一泊」したりもしている。生まれて初めて零下三十五度という酷寒を体験したのも、この旅程においてであった。

かくて一行が海城に着いたのは、二月六日午後四時すぎのことである。

この海城で彼は二度ばかり、部隊からの依頼により葬儀の司祭に参加しているが、これが第三師団で仏式により葬儀が執行された最初だったという。彼の日録からここに採録するのはそのなかの二度目のぶんで、将校斥候にでた将校と兵士一名のものである。

『……埋葬式を城東薺夢山さくむさんに執行せんとて、予等一行及び東西両本願寺派遣僧を請せられ、午前十時出棺数名の兵士は之を前衛し、次に大尉の遺骨、次に兵士の遺骨、次に僧侶、次に各将校、次に又数

百の兵士は護衛し、威儀肅々城南門を出て、東に道して山頂の墓地に至る。市街を離れんとすれば各将校より贈られたる数十旒の旗、列に加はりて壯觀を極む。式場に至れば種々の珍菓を供へ、花瓶を並べ、各隊より力の尽さるゝ限りの献供をなしたり。此日激風吹荒び、六花紛々として降り、寒威剣の如く骨髓に徹す。中隊長は祭主として祭文を読み、東西両本願寺僧読経し一行は荻原師を導師として熱誠を抽んで、式を行ふ。参列の戦友肅として声無く、山川も為に悲壯の情を呈するに似たり』(岩井智海著「道しるべ」)

そしてまた智海たち一行はここで作戦待ちの待機中に、約九日間にわたり、真宗の従軍僧たちとスケジュールを割りふりして説法の会をもった。

実施はおおむね一回一個大隊を標準に行われたらしい。海城は第三師団の担当区域で、当時の一個師団は歩兵四個連隊のほかには砲兵一個連隊、騎兵と工兵各一個大隊その他という編成で、一個連隊は三個大隊で構成されていた。説法会となると師団司令部や兵站司令部、衛生隊、輜重などは単独で聴聞する場合があるから、最低十五回以上は繰り返す勘定になったであろう。

この海城での説法会の模様も、智海が「法話会の概況」という小見出しつきで、つぎのように綴っている。

『当城法話は東本願寺派遣僧と互ひに交替して為す事となり、真宗は歩兵第五旅団第六聯隊より始め、予等は歩兵第六旅団第十九聯隊より始めたり。会場は多く陣営にて或は馬置場を使用するもあり、

駿馬嘶く所法音響きて勇しく、或は孔子廟庭活仏を現出し、而して予等生命を賭せし第一軍慰問法話の結願とも称すべきは、当十六日午前八時より、隊は雷名轟く砲兵第二大隊、会場は白雪皚々たる同大隊陣營の広庭、猛勇なる数百の貔貅は凜烈たる朔風を苦ともせず、敵として整列し、砲兵第三聯隊長柴野大佐、第二大隊長兵頭少佐を始め、中隊小隊の諸隊長臨場せられ威風あたりを払ふ。時至れば予等会場に進み、萩原氏は泰然として椅子に憑り、予は例に依って先づ登壇す。実に此一場の演説は従軍已来百有余日、千辛万苦を嘗めし第一軍の法話も此席を以て終結するかと思へば、勇氣は一層胸間に躍り、活殺自在の法門を掲げて、満腔の熱心を吐露す。説き来り説き去り、稍酣ならんとする途端、雷轟電撃の激響

は空天を掠めて来り、此瞬間伝令騎兵は空を駆って警報を伝へ来る。予は砲声近きにあり、突進奮闘天晴大功名を立てられよ、健全にしてと勇ましく、説きつつ壇を下れば、隊長は砲煙彈雨の中に活法を説く、これ未来までの記念ぞと、駿馬に鞭って戦地に臨まる。予等は是にて砲煙の中に第一軍悉く慰問の目的を達したるを喜び、仏教万歳、管長猊下万歳を祝し……』(岩井智海著「道しるべ」)

この末尾は戦場の雰囲気を生々しく伝えているが、ちょうど二月中旬から月末にかけての第三師団は、零下三十度というのにまともな防寒具らしい防寒具ももたず、おまけに兵力不足ときて、攻勢にでどころか逆に清国軍に包囲されるという最悪の時期だったのである。清軍はこの前後、五回ほど攻撃をし

けているが、この二月十六日の説法最中の攻撃は、その第一回目に相当するものだった。

日録の最後の部分に、「第一軍ことごとく慰問の目的を達したるを喜び、仏教万歳、管長猊下万歳を祝し」たとあるように、荻原と岩井の外征軍慰問使はこの法話会を最後に、任務を終了した。その肩の荷のおりた感情が筆にも踊っているが、しかしこれで無事、帰国となったのは高齡の荻原雲台だけで、若い岩井のほうは追いかけて、

——正使に任ずる。

むねの辞令が宗から届き、そのまま居残ることになった。

一方、軍事面はどうなっていたかというのと、大本営が最初に企図したのは直隸平野^{ちりきへいや}での決戦で、その意をうけて第一軍はすでに十二月中旬にその北東端に達し、春の雪解け^{ゆきとけ}を待っていた。第三師団の海城滞留はその一端であ

る。しかし大本営は予想以上の酷寒と輸送の困難さに直隸平野での決戦をあきらめ、作戰目標を山東半島にある清国艦隊の根拠地・威海衛の攻略に変更し、大山巖大將を軍司令官とする第二軍を大陸に送りこんでいた。旅順はすでに昨年中に、そして威海衛の清国海軍は二月十二日に降伏し、第二軍の大部分は遼東半島に集結中——というのが、二月十六日頃までの動きである。

このあと、第一軍は三月に入って海城西北の鞍山^{あんざん}、牛壮城を攻略し、三月六日には第一軍に配属となった第一師団（第二軍所屬）が營口を占領、九日には第一軍の三個師団が田莊台を占領して停止した。これが日清戦争最後の戦闘となったものである。

というのが、昨年の十月ころから清国側の講和働きかけがあり、十二月と翌年二月には講和打診に使節が来日、という動きがあった

からである。この講和交渉は三月十八日に清国から正式申し入れ、二十日から下関で日本の総理・伊藤博文と清国の全権・李鴻章が講和交渉、三十日停戦、四月十七日講和成立、という形で進行してゆくのである。

もともと岩井の日録は、二月十六日で終わっている、それ以後の彼の行動がどんなものであったか、語るべき資料はない。しかし戦後、彼が第三師団から感謝状を贈られているところからみると、荻原雲台が帰国したのちも、おおむね第三師団と行をともしたとみて、いいのではないか。

かくて彼の日本帰還は六月十日となる。そして京都では知恩院、東京では芝の弥生館で従軍報告の演説会を催したことは、すでに記した。

ところで浄土宗の実施した従軍行を、岩井

の日録をベースに考究した論文がある。日本私学教育研究所研究員の野田秀雄^(註2)が執筆した『近代における浄土教団の研究―日清戦争従軍慰問使覚書』がそれである。

そのなかで野田は岩井の日録を、『……想像を絶する幾多の困難を克服しながら、従軍記を残したが、これが後世貴重な資料となっている』と高く評価している。そして、当時の朝鮮の世相、市町村の模様、風土、宗教などが詳しく報道されていると概括しているが、その一端については、すでに引用したとおりである。

そして野田は、荻原と岩井が、『ほとんど休養らしい休養をとる間もなく東奔西走しており、一日の行程も早朝から夜遅くなることもたびたびであり、時には食事も満足にできないほど熱のこもった演説会も行われている。身体的にも精神的にも非常に厳しい状況下に

置かれての従軍慰問であつた。この従軍に堪え、所期の目的が達成できたのはどうしてであらうか。何がこの厳しい従軍を支えたのであらうか。』と問ひかけ、建て前^(せまへ)としてはともかく、

『むしろ本音は「尚ほ戦地に万難を嘗めらるる兵士に至つては、聊^(いささ)か真心を以つて申さんと云う」というところにこそあるのではなからうか。「異国で戦っている兵士たちに、自分のできることは何か」という僧侶としての純粹な自覚からうながされる結論が先行したのではないだらうか。そこには国家としての意識をもち、一宗からの至上命令ということを背景にした人間として、また仏教徒としての自覚があつたのではないだらうか。日記を含む報告の随所にそのことをうか

がわせる言動がみられる。法話にあたつての熱心な様子に多くの聴衆は感銘をうけており、その責任者の謝辞などは、たんなる外交辞令的なものとは断言できない。また彼地でさびしく亡くなつていった兵士や労働者^(せむし)たちに、本当に心からの痛恨の涙を流している。これは、国内では清国捕虜に対して中国語で教化を行い、敵も味方もなくともに戦死者を弔うなど、怨親平等の仏教思想を主とした人間愛に満ちた精神から自然に醸^(か)し出されるものである。立て前^(てまへ)が従軍の困難さを支えていたのだらうが、むしろそれ以上に人間としての同朋意識が強く働いて精神的な支えとなつていたに相異ない。敵味方の別なく、人間を愛する心情が日記等を通じて感じとられ、このような様々な精神的な背景があればこそ、その目的が完遂

されたといえる』(野田秀雄「近代における浄土宗教団の研究」)

と書いています。

野田の観察するとおり、この従軍行に、岩井智海自身、最も純朴に接したのだった。だから彼は随所で感動し、その感動がまた随所(注5)で他に向かつて放射された。されば安東県で、岩井の法話に感激した第一師団の輜重中尉男爵山名義路がわざわざ面会を求め、「法話をなしつつ慰問をする、これはまさに開戦以来初めてのことで、あなたがたは軍僧の開山です」と謝辞を述べたのをはじめ、多くの将兵から感謝の言葉や手紙が、智海はむろん、遠く内地から浄土宗にも寄せられ、おそらくそれらをうけてであろう、当時の宗門雑誌

「華頂」は、

——仏光ヲ戦地ニ輝カシ朝野ニ宗教ノ必要ヲ感ゼシメ誠ニ好結果ヲ得タリ。

と、その業績を多としているのであった。

(つづく)

(注1) 浄土宗は開戦とともに従軍慰問使の派遣を企画し、他宗に先んじて荻原雲台と岩井智海の両師を第一軍の担当戦域に派遣したが、これに刺激されてか、大本営と各宗派が連携し、第二次慰問使派遣をぞくぞく行つた。浄土宗は再度これに、宇治の平等院住職・大門了康と東京浅草の大秀寺住職・林彦明を任命し、両師は近衛師団付きとして台湾征討に従軍した。

(注2) 野田秀雄師の「近代における浄土宗教団の研究——日清戦争従軍慰問使覚書」は日本私学教育研究所の機関紙

(注3)

『日本私学教育研究所紀要 第一七号』に掲載された。野田師は昭和十二年生まれ、大正大学文学部史学科卒、早稲田大学の大学院文学研究科修士課程修了。現在は浄土宗見性寺住職で華頂女子中学校教頭、知恩院史料編纂所嘱託研究員でもある。

岩井智海は東京芝の弥生館で行われた従軍慰問使報告演説会で「従軍実況の所感」と題し講演を行ったが、その冒頭で、

「元来仏教というものは、僧侶が勝手に弘布したか、あるいはある信者が自由从他から持ってきて拡張したかというに、決して左様ではない。今を距たる一千有余年前、朝鮮の国王が欽明朝に貢物の一つとして仏教を献じ、年月をへてついに仏教をわが国にご信受されることになった。この原因は以って国家臣民の安全を守らせたまおうとの

(注4)

お考えからだったと私は思う。すなわち三十二代の帝は自ら出家され、皇族は四百七十有余のお方が仏法拡張に尽くされた。いずれの宗といえども天皇のご厚意にあずからぬものはないが、特に浄土宗は深い。さればこの際、国に尽くさねば何の面目あって上は仏祖にたいし、また遠く世々の帝にたいし立つことができようか(要約)」

という従軍慰問使としての決意を語った。これについて野田氏の論文では、「多少そこには時代の様相もあ」っての発言、という見解がとられている。

日清戦争では輜重補助などのために、多くの人夫が雇われて戦場に送りこまれていた。それにかんし、鴨緑江の南岸にある義州に向かう模様を叙した岩井日録十二月十四日の項には、

『(昨十三日から急に寒波襲来し)途中に有馬組人夫寒の為倒れ居り、之を検す

『江戸物語』

細田隆善／豊明／著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

● 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録

● 定価一八〇〇円【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

△発行・発売△ ノンブル社

東京都新宿区新小川町六一三九一七〇一
電話(〇三)二六九一二九三 二六七二六六三七
振替(東京)七一〇九三ノ千二六二

るに既に落命せるもの、如し。宝丹を
取出し之を与へんとするも、手凍りて
取出す能はず。遺憾乍らお十念を授与
し来れり。我も殆んど全身氷の如し』
またその翌十五日の項には、
『昨日途中に凍死せし有馬組人夫の榎
本善四郎の為副官輜重大尉武田信恭氏

臨席葬式を営む。参列の人夫等一行の
厚意に感じ、暗涙を絞る者あり』
の記述が見えている。ほかにも、兵
士と変わりなく人夫たちにも説法を口
演したことなどが記録されている。
(注5) 安東県は鴨緑江の北岸にある九連城西
南の、人口四千(当時)ほどの町。

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十五巻 九月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成元年 八月二十五日

印刷

平成元年 九月 一日

発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番



教え・しきたり・行事の解説書 (日常勤行式付)

仏事と信仰生活・浄土宗

宮林雄彦 編

● B 6 版並製
● 百四十二頁
● 定価八百円 (送料二〇〇円)

本書は浄土宗檀信徒の信仰生活のための手引書である。内容は仏壇のまつり方や礼拝のしかたをはじめ、浄土宗の教え、浄土宗の年中行事などを多数のイラストや写真を用いて解説する。

【目次】第一章 仏教と浄土宗の教え
① 仏教の教え／② 仏教の流れ／③ 浄土宗の教え／④ 念仏信仰の真髄／⑤ 寺参り墓参り／第二章 日々の信仰生活／① お仏壇／② お仏壇への礼拝のしかた／③ その他、仏壇・仏具、お墓参りの注意／第三章 お経・念仏の実践／① 日常のおつとめ／② その他のお経／第四章 仏教行事の知識／① 年中行事／② 葬式と年忌供養／③ その他の仏教行事



発行発売 群 書

〒170 東京都豊島区巣鴨 4-7-6-403

発売続群書類従完成会

〒170 東京都豊島区北大塚 1-14-6

☎東京 (03) 917-8411
振替口座 東京 7-168759

☎東京 (03) 915-5627
書店でも注文できます。